ジェンダー観への気づきと意識の変容
―授業「男女共同参画社会」をふり返る―

齋藤由美子

はじめに

1999年に「男女共同参画社会基本法」が成立し、政府は職場、家庭、地域等社会のあらゆる分野において男女が平等に参画できるジェンダー平等な社会を目指すことをビジョンに掲げ、政策を進めてきた。2000年には、男女共同参画基本計画において「男女共同参画を推進し多様な選択を可能にする教育・学習の充実」を謳い、その施策の基本的方向として「男女平等を推進する教育・学習」を掲げ、具体的施策の一つとして「高等教育の充実」が示された。そこでは「高等教育機関における教育・研究活動においてジェンダーに敏感な視点が組み込まれるよう努めるとともに、様々な学問分野への女性の参画を促進する」ことが挙げられている。

実際に高等教育の分野においても、女性学／男性学、ジェンダー論といったジェンダー関連科目は増えている。独立行政法人国立女性教育会館（NWEC）のデータベースによると、1996年度には785科目であった（大野 2002）が2003年度は2,794科目と増加している。

本学においてもジェンダー関連の授業として、総合文化学科においては2005（平成17）年度から「ジェンダー論」として始まりその後３年間続いた。2008（平成20）年度には「ジェンダー論」と「ジェンダーと社会」の二つに分かれ、また2010（平成22）年度には「ジェンダー論」は「くらしと文化」に変更され、2014（平成26）年度までの５年間は「くらしと文化」として、また2015（平成27）年度より2020（令和２）年度までの６年間は「ジェンダー論」として開講している。また人間科学部子ども教育学科においては、「社会を見る眼」として2011（平成23）年度より2016（平成28）年度までの６年間、その後２年のブランクの後、2019（令和元）年度より「男女共同参画社会」として３年生対象の授業を現在まで開講している。筆者は総合文化学科では2011（平成23）年度からのジェンダー関連科目を担当し、また子ども教育学科では2011（平成23）年度からの６年間と2019（令和元）年度からの２年間を担当している。

本稿では本年2020（令和２）年度の授業「男女共同参画社会」をふり返り、その効果を検討することとした。

１．近年のジェンダー意識をめぐる状況

本邦におけるジェンダーに関する意識は近年徐々にではあるが変化している。例えば内閣府調査（2019）によると「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という固定的性別役割分業意識は、1979年では反対は20.4％だったが、2019年にはこれまでの最多となる59.8％と半数を超え、大きく変化している。しかし、現実の生活の中ではジェンダーギャップがいまだ多く存在し、日々の暮らしの中でもジェンダー規範が様々な生きにくさを生みだしている。それは６歳未満の子どもを持つ家庭における「家事・育児時間」の夫と妻の極端な差にもみられ、その社会的背景にもジェンダー規範が大きく影響を与えていることがうかがえる。また、女性の医学部受験に際しての複数の大学側の操作に内在する教育の場における差別の問題やそれを是とする意見の背景にもみられ、また新型コロナウイルス禍におけるＤＶ被害の増加やシングルマザーの生活困窮はジェンダーに基づく女性の立場の脆弱性を顕在化させた。実際に内閣府のアンケート結果においても社会における「男女の地位の平等感」では1995年では75.6％、20年以上たった2019年においても74.1％が「男性の方が優遇されている」と回答していて、男女の置かれている不均衡な状況は大きく変化していないと人々が認知しているといえる。

湯川（2006）は、既存のジェンダー規範への調査等にみられる反受容的認知と現実生活における受容的認知とのギャップの要因として、ジェンダー認知における個人差の問題と、一人の人の中にある二重基準があるのではないかと述べている。湯川はその個人内、あるいは個人間にみられるジェンダー認知の差はジェンダーに関する感受性（ジェンダー・センシティビティ）に大きく因っているとし、ジェンダー差別意識を解消するには、ジェンダーに関わる問題や現象に対する感受性を養うことが肝要であると述べている。

今まであたりまえとして受け止め意識してこなかった社会で起こっている現象や問題の中に、また自身の言動や考え方に、ジェンダー・バイアスや差別意識があることに気づく感受性を持つことにより、改めて社会問題や自身の認知の枠組みを批判的にふり返り問い直すことができる。そこから社会や自身の問題を主体的に考察する視点が養われ、それは今までの感じ方や思考の前提となっていたジェンダー意識を変容させることにもつながるとも考えられる。そのような感受性を養うためには、基礎的知識や教育的働きかけが必要である。

今回の授業においては、そのようなジェンダーに敏感な視点を養い、その視点をもって自身や社会の問題を捉え直し、ジェンダー意識を変容させ、主体的にジェンダー平等な社会について考察し、課題を解決していこうとする力を養うことをねらいとした。

２．授業「男女共同参画社会」について

２．１　授業概要

ジェンダーに敏感な感受性、ジェンダー・センシティビティを養い、それを視点として自身のこれまで意識されていなかったジェンダー意識に気づきそれを問い直すこと、その視点をもって自身の将来のライフプランを見直し、また周囲に起こる問題や社会問題を再解釈することでジェンダー平等な男女共同参画社会を具体化するために必要なことを考察することを目的とした。

ジェンダー観は、キャリア形成やライフコース選択にも大きな影響を与える。中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（2011）においても、「男女共同参画の視点を踏まえたキャリア教育」が課題として挙げられている。キャリアを「職業生活だけでなく、生涯に渡って遂行する様々な立場や役割の連鎖」と考えた時、生涯を見据えた人生の選択やそれを取り巻く社会の状況や問題点を理解することが大切である。現代ではライフコース選択やキャリア形成には男女による違いが大きく、その違いとそれらに影響を与えているジェンダー観を理解することが、これからの自身の生き方やキャリア形成を考えるために不可欠であろう。これから職業と人生のコース選択をし、社会に出ていく学生には、ジェンダーと男女共同参画の視点をもって自身のライフプランを考えることもねらいとした。

また、それは自己のキャリア形成だけでなく、これからの社会を考える、変えていくことにつながるという社会的視点も大事であり、男女共同参画社会を形成する一人としてジェンダーを考えることもねらいの一つである。

さらに、子ども教育学科という将来教育、保育に関わる学生が多い学科においてジェンダーに関する授業をすることは大切なことと考える。なぜなら彼らは今後教育・保育の現場で子どもたちに接し影響を与えていくわけだが、教育という場はジェンダーの社会化、性別化における強力なエージェント（担い手）の一つであり、子どもたちは、そこで意識的、無意識的にジェンダー意識を形成していく。教育の場においては表立ったカリキュラム以外に「隠れたカリキュラム」といわれる、ロールモデルとしての教員や、教員の日常の言動に中にあるジェンダー意識等が意識しないうちに子どもたちに影響を与え、ジェンダー意識を培うことにつながると言われている（河野2014、木村2015）。そのような役割を将来担う学生が、ジェンダーに敏感な視点を持ち、日常の教育活動を行うことは子どもたちのジェンダー意識形成に多大な影響を与えると考えられる。また現代の保育・学校教育の現場で起こる多様な問題に対処する時、その問題の社会的背景を見る眼が必要となる。その際、今までの固定的な視点だけでは背景を理解することは難しく、多様な視点や問題を相対化する能力が必要となってくる。ジェンダーの視点で様々な領域の問題を考え、分析する学習は社会問題の背景を考える力を育むものと考える。

今年度の初回は遠隔授業であったため、学生にはグーグルスライドにより目的を以下のように説明した。

■目的

・男女共同参画社会を考える時のキー概念であるジェンダーの基礎的知識を得る

・その視点で私たちの生活や社会事象・問題を考察し、その解決策を考える事がで

きるようになる
・ジェンダーの視点で、自分自身のくらしの選択を考える
・男女共同参画社会実現への歴史、取り組みを理解し、自分の関わり方を考える

シラバスに載せた授業概要は以下の通りである。

男女共同参画社会を考える時のキー概念は、社会の中に見えないルールとして潜在し、内面化しているジェンダーです。この授業では、その概念を理解し、その視点で私たちのくらしや社会問題を再考し、多様な一人ひとりがその人らしさを発揮できる男女共同参画社会をそれぞれの現場や地域で実現にするにはどうしたらよいかを考えます。

授業では、授業者の男女共同参画センターでの実績や事例も活かしながら、講義やＤＶＤ視聴、シミュレーション、グループワークを多く取り入れ、多様な考え方を学び、主体的に学ぶ態度を醸成します。

２．２　授業内容

回	項　　目	内　　容
1	講義ガイダンス 男女共同参画社会とは	講義概要 男女共同参画社会の概要を知ります
2	ジェンダーを知る	ジェンダーとは何かを自分の暮らしと結びつけて考えます
3	性の多様性	性の多様性、性的少数者について理解を深めます
4	構築されるジェンダー	ジェンダーを形成する担い手としてのメディアを考えます
5	らしさと性別役割分業	社会で期待される女・男性像と性別役割分業について考えます
6	恋愛・結婚とジェンダー	恋愛・結婚とジェンダーがどのように関わっているかを考えます
7	家族の諸問題を考える	近代家族・主婦の誕生、そこから生まれた家事の問題を考えます
8	仕事の問題を考える	現代の仕事の現状とジェンダーのつながりを知ります
9	ワーク・ライフ・バランスを考える１ 「私の理想の未来を実現するために」	現代の男女が望む生き方・働き方（ライフコース）と、それが実現できにくい要因を考えます。私はどんなくらしや仕事をしたいと思っているのでしょう。他の人はどうでしょう
10	ワーク・ライフ・バランスを考える２ 身体加工とジェンダー	私たちが望むＷ・Ｌ・Ｂを実現するためには何が必要でしょうか。個人、社会の問題を考えます 装いや化粧、美容整形など、身体加工をジェンダーの視点で考えます
11	教育とジェンダーを考える	教育制度、教科書、授業、モデルとしての教員等をジェンダーの視点で考えます

12	暴力とジェンダーを考える	ＤＶ・デートＤＶや性暴力の現状とその背景について考えます
13	男女共同参画社会への取り組み１	山形県における男女の「くらしと仕事」の実情と問題を考え、さらに行政の男女共同参画の取り組みを知ります
14	男女共同参画社会への取り組み２	生きやすい社会を作るには？男女共同参画社会基本法、男女雇用機会均等法など男女平等な社会を目指すための法律についてＤＶＤ視聴も通しその意義と問題点を考えます
15	ジェンダーと私と社会	生きやすい社会とは？男女共同参画社会とは？これまで学んだことをふり返り、私たちの生き方、これからの社会との関連を考えます

第１回（５月８日）から５回（６月８日）までの授業は遠隔授業であった。その期間はグーグルスライドを使用しスライドノートに授業で説明する内容を書き込み学生へ送付する形をとり、また毎回課題を課し、その結果を次回の授業で紹介し他学生の考え方を知る機会とした。

内容としては、１～５回は「男女共同参画社会」「ジェンダー」の概要を知るものであり、６～９回は恋愛や結婚、仕事といったライフイベントや自分の生き方をジェンダーの視点で考える、10～12回は各領域とジェンダーの関係を考える、13～14回は課題解決の取り組みを知るものとなっている。15回は全体のまとめである。

３．授業の分析・考察

３．１　分析方法

今年度、授業の評価に関し、初回と最終回にジェンダー意識の変容を把握するために主にジェンダー尺度を測る質問紙調査を授業前後に実施し、それを比較する予定であったが、新型コロナウイルスの感染予防のため遠隔授業となり、遠隔授業の初回に質問紙調査を実施することは適当でないと考え、今回は最終回に学生が提出した「ふり返りシート」をもとに考察することとした。

今回、学生がこの授業を受講し、彼らにジェンダーに敏感な視点は養われたか、自身のジェンダー意識に気づき吟味され変容したのか、その視点で社会の事象や問題、自身の生き方をふり返り問い直すことができたのかを主に考察することとした。

■　分析の視点としての「意識の変容」

日本において社会教育の講座等で「意識変容の学習（transformative learning）」の重要性が認められ実践されている。「意識変容の学習」の理論を最初に提起したのはアメリカの成人教育学研究者のジャック・メジロー（Jack Mezirow）だった（1978）。そのメジローの理論をもとに「意識変容の学習のプロセス」として提示したのがＰ・クラントン（Patricia Cranton）である。クラントンは意識変容の学習とは「自己を批判的にふり返ろうとするプロセスであり、私たちの世界観の基礎をなす前提

（assumption）や価値観を問い直すプロセス」（クラントン1992＝1999：204）であるとし、前提とは、単純に当然と思われること、仮定のことであると定義している（クラントン1992＝1999：209）。さらに「人が抱いている前提や価値観は根強いものなので、何らかの方法でふり返りのプロセスに組み入れられるものでなければ人はそれらを検討するために立ち止まらない」と意識変容のためにはふり返りを促す何らかのできごとや働きかけが重要であると述べ、それは「人との活発なやりとり、入念に企画された演習や活動、読書や視聴覚教材といった意図した働きかけ」によるとしている（クラントン　1992＝1999：204）。

意識変容の学習は、自身のもつ前提やそれが問われていることに気づき、それらをふり返り吟味し、さらに前提を批判的にふり返ることで、すでに経験の積み重ねから形成されていたパースペクティブが変容するプロセスであるとし、それをモデルとして表した（図１）（クラントン1992＝1999：206）。

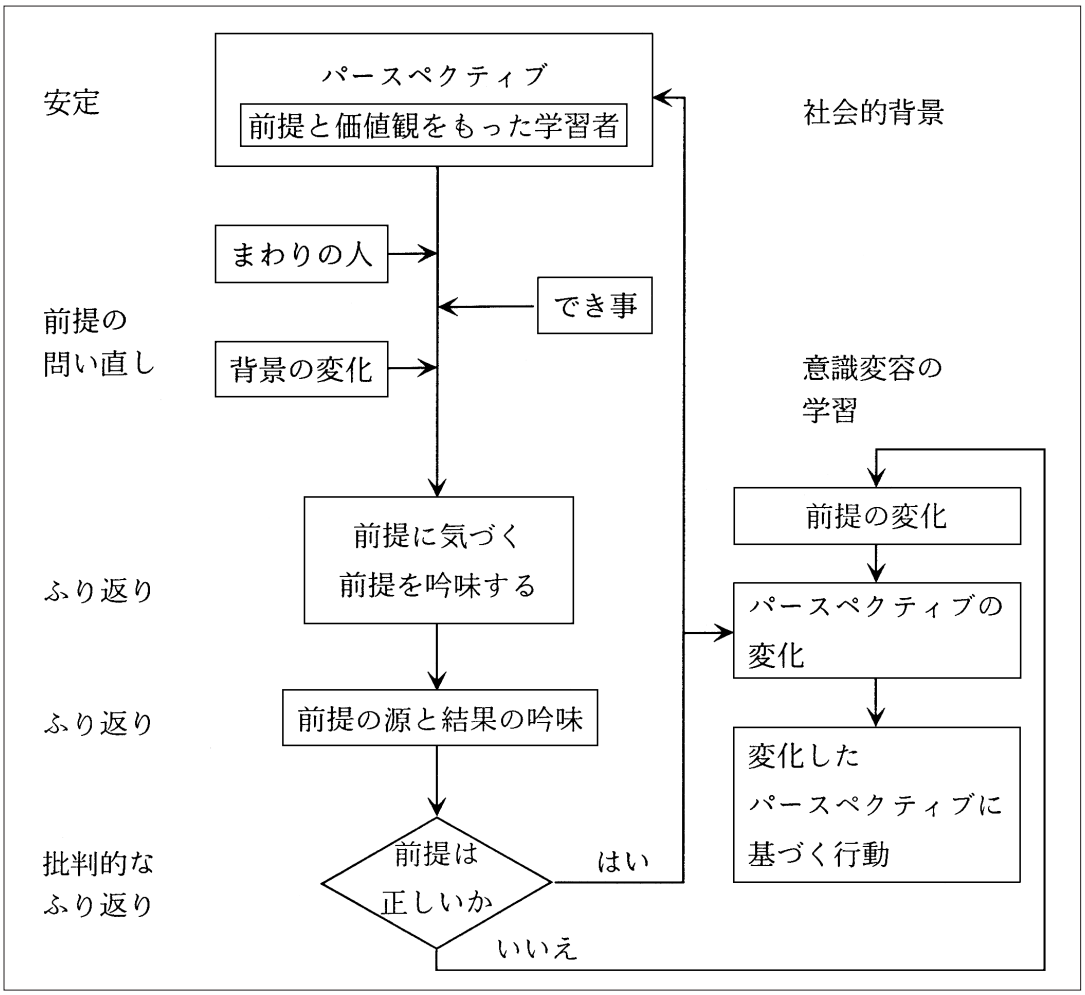

図１　クラントンの意識変容の学習のプロセスモデル
パトリシア・クラントン著（入江直子・豊田千代子・三輪健二訳）
『おとなの学びを拓く』鳳書房　1999　p 206

これまで述べてきた意識変容のプロセスとしての学習は主に成人教育において適用されてきた理論である。しかし、ジェンダー意識は人が幼い時期から日常生活の中で

無意識的に身につけ、大学生となる20歳前後においてはすでに認知の枠組み、固定観念として定着していると考えられる。そこでジェンダーに関する学習は、新たな知識の獲得だけではなく、その学習の過程において自己をふり返り、既に形成されている前提としてのジェンダー意識に気づき、問い直し、それを変容させていく「意識変容の学習」であるとも考えられるだろう。その再吟味されたジェンダー意識を視点として自身の生き方や社会の問題を考えていくことで、問題解決への主体的な考察が可能になっていくと考えられる。

これらのことから今回の授業の分析・考察は、受講によって「ふり返りによる自分自身の前提への気づきや問い直し」がなされジェンダー意識は変容したかを中心とし、またジェンダーに気づく敏感な視点が養われ、その視点をもって社会事象やその背後にある社会構造、自身の問題を再検討することができたかに注目して進めることとしたい。

３．２　分析と考察

15回授業終了時に、授業のふり返りシートを配布し、それに記入して提出することを求めた。

受講者53名中、49名から提出されたそのふり返りシートをもとに考察を進めることとする。

（１）全体の理解度

問１は「授業を終えてみて、あなたはこの授業の目的にどのくらい到達したと思いますか」という質問に、自分でパーセンテージを書き込む形で回答するものである。その結果は以下のようであった。

① ジェンダーの基礎知識を得る：平均82％
② ジェンダーの視点で社会の事象や問題を考えることができる：平均80％
③ ジェンダーの視点をいれて自分のくらしや生き方を見つめ、考えることができる：平均81％
④ 男女共同参画社会実現への取り組みを理解し、自分との関わり方を考える：平均78％

ほとんどの項目に90％をつける学生や反対に60％の学生もいたが、平均するとこのような結果であった。おおよそ平均としてどの狙いも80％程度が達成されたと考えられるが、この質問はそれぞれの学生が主観的に考える達成度であり、客観性には乏しいもので、これだけで実際に学生がどれほどの達成度があったかどうかは断定できない。

③が②よりわずかに多いのは、自分の事として考えることのほうに関心が高かったといえるだろう。また実際に８、９、10回の授業において、自身の未来像を描き、グループワークで他学生の未来像を共有し、さらにその生き方を実現するために必要なことを考えた。またその後ＤＶＤ視聴を通してノルウェーのワーク・ライフ・バランスの実情を知り、それらから考察したことをふり返りシートにまとめるという一連の学習により、自分のくらしや生き方（キャリア）を再考する機会が多かったことが影響しているとも考えられる。また、社会問題やその背後にある社会構造まで考察することは難易度が高かったと考えられる。

（２）授業による効果

１）あたりまえと思っていたことの変化

ふり返りシート問２は「『今まであたりまえと思っていたことが違っていたこと』『それは実際にはどのようなことでしたか』」を考え記載する問いであった。

最も多かったのは性別役割分業、働き方に関してのもので11名があげていた。それは大きくは二つに分けられる。一つは性別役割分業の現状や歴史、概念への思い込みであり、もう一つは自身の性別役割分業意識に関してである。前者の方が後者より多く述べられていた。

講義やＤＶＤ視聴により、「女性が働くことはあたりまえと思っていたが、昔の女性の職場での現状やその改善への努力を見て、女性の思いがあっての今の状況なんだと思い、あたりまえではないんだと思った」という意見や「妊娠、出産すると多くの人がなかなか復帰できないことはあたりまえと思っていたが、ノルウェーのＤＶＤを見て、法律や権利が保障されている国があることを知って、全然しょうがないことではなかったのだと気づかされた」など、自分が持っていた社会状況に関する概念とは異なる状況が提示され、自身の前提が揺れている状態であると考えられる。さらにそれにより、社会を見る視点の広がりがあったことがうかがえる。

また、自身の生活や生き方への影響として、「男性は外で働き、女性は家庭で家事をするのはあたりまえで自分も結婚したらこのようなものになるのだと思っていたが、それは近代になってできた考え方で、女性も社会にでて働くようになり、共働きが多い現在では、このような性別役割分業はふさわしくないと思った」という性別役割分業そのものに関する前提の変化とわずかではあるが自身の生き方へのふり返りが語られている。それはジェンダー規範が時代によって形成されているという新しく獲得した知識により前提を問い直している状態であると考えられる。

次に多かったのは「らしさ」に関する気づきで７名があげている。これは交際をしているカップルの女性側からの新聞投稿記事で、女性は必ずしも男性が道路側を歩くことやおごってもらうことを喜んでおらず、その対等性がなくなることを悩んでいるというものであったが、特に男子学生にとっては衝撃的であったらしく、ほとんどが男子学生による気づきであった。ある学生はそれに関係して「プレゼントや贈り物をする際、女性であればかわいいもの、男性ならかっこいいものを選べば喜んでくれると思っていたが、絶対に喜んでくれるとは限らないし、勝手にその人の性を決めつけてしまった自分がいることに呆れた」と述べている。そこには自身の思い込みへのふり返りがあり、女性性、男性性の前提への変化がうかがえる。

育児休業の制度やそれを取得できない要因などが思っていたものと違っていたことをあげたものが６名、ＤＶ被害の実態やメカニズムが５名、教育の場における隠れたジェンダー問題や開発途上国の教育問題を述べているものが５名、その他「男女共同参画社会」の概念に関してや「男女雇用機会均等法」の制定過程への驚き、結婚の条件に関するもの、また自身の性についての考え方の変化などが数名ずつからあげられた。それらは授業による働きかけにより社会の現状や構造に目が向きだしジェンダーの視点で分析することが試みられ始め、自身の前提の問い直しが始まっている状態にあると考えられる。ここでは自身のジェンダー意識が変化したというより、社会の現状や問題への見方が変化した方が多いといえる。これらがさらなるふり返りのプロセスに組み入れられれば、より深い前提の吟味が行われ、視点の深まりも期待できると

考えられる。

またこのような「あたりまえ」への気づきは、社会事象や現状、社会通念を理解するには、固定的な視点だけではなく多様な視点が必要であることへの気づきにもつながっていくのではないだろうか。

２）気づきとそれをもたらすもの

問３では「最も印象に残ったテーマや内容はどんなことでしたか」を聞いた。

ここでは授業による気づきやそれをもたらしたものが多く記載されている。最も多く挙げられたのはノルウェーのワーク・ライフ・バランスの実情をテーマにした『地球イチバン』「地球でイチバンお母さんにやさしい国ノルウェー」（ＮＨＫ 2012）の視聴による気づきであった。男女共に仕事と子育てを両立できる環境やその制度整備がなされていることへの驚き、日本ももっと変われるのではないかという意見が記されていた。

次に５名からあげられたのは「ジェンダー意識」についてである。自分自身に「男だから、女だから」という固定観念が想像以上にしみついていたことへの驚きが最も多かった。これは「ある外科医の話」という活動で、ある一文が書かれている文章を並び替えて意味が通じるようにするという教材であるが、そこに「外科医は男性」という思い込みがあるとなかなかうまく並べることができないという仕掛けがある。これは遠隔授業の２回目でグーグルスライドにより実施したものであり、学生が一人で実際に取り組むだろうかという危惧もあったが、それぞれに能動的に取り組んだことがうかがえ、そのような状況でも気づきはあるということを認識させられた。このような気づきは、自分自身がもつ前提の強さに気づき、改めてそれを吟味する過程につながるものといえるだろう。

また同じく５名からあげられたのは「男女雇用機会均等法」が制定されるまでのプロセスをとりあげたテレビ番組『プロジェクトＸ～挑戦者たち～』「女たちの10年戦争」（ＮＨＫ 2000）の視聴の結果、法律公布施行までの人々の思いの強さや、それが成立する以前の女性たちの置かれていた劣悪な労働環境への驚きが語られていた。

また自身の未来像を描き、グループ活動で他学生と話し合ったことで、「自分の人生設計を明確にできたことだけでなく、皆で話し合うことで自分の考えを深めることができたし、未来像を実現するために必要なことを考えることで目標を明確にすることができた」と述べている学生もいた。その他、デートＤＶや海外の児童婚や教育の実情、男性の育休制度、#Me too運動、ＣＭ分析等が２～３名より印象に残ったと述べられている。

この記述からは、授業のさまざまな働きかけにより自身の前提としてのジェンダー意識が揺さぶられたり、社会問題への気づきがあったことがうかがえる。その気づきをもたらす働きかけとは、他国や過去の実情に関してのＤＶＤ視聴、また他学生の多様な考え方や生き方に気づいた話し合い、さらに「ある外科医の話」などの自分から能動的にかかわる活動や新聞記事・テレビドラマ分析、ＣＭ分析等であった。自分が思っていたものとは異なる実情や概念、考え方との出会いによって今までの自身の思い込みや概念が揺さぶられ、時には葛藤がおこり、それを再吟味することで新しい気づきがもたらされたと考えられる。既知とは異なる事実や状況、考え方との出会いは気づきをもたらしやすく、それにより今までの自分の意識の枠組みが問い直されるこ

とが多くあり、そのような出会いや仕かけは有効であるといえよう。

３）授業による自身への影響

問４では「この授業がこれからのあなたの暮らしや生き方に影響を与えたことはありましたか、それはなんでしたか」という設問をした。授業により自分自身の生き方に影響を与えたことについて問うた。その回答を見ると、大きく４つのカテゴリーに分けられる。それはジェンダーに敏感な視点の獲得、ジェンダー意識への気づき、意識の変化による生き方についての考え方の変化、行動の変容である。４つのカテゴリーの内容はおよそ以下の通りである。

■ジェンダーに敏感な視点の獲得

・町を歩いていて母親に子どもの面倒をすべてまかせて携帯を見ている父親を見ていると違和感を感じるようになった
・トイレの標識の色など、あたりまえだと思っていた色の使い方を意識してみるようになった
・男性だから女性だからという言葉を使うべきではないと思う
・「男らしい」「女性っぽい」などの言葉を使わないように、自然とそういった意識がついている
・新聞を何気なく見たときに、自然と男女平等やジェンダーに関する記事に目がとまるようになった
・身の回りにあるジェンダーや平等でないものや様子に目を向けてみたり探して考えてみたりするようになった
・あたりまえのことをそのまま受け入れるのではなく、「これおかしくない？」と思い始めることの大切さ
・今まで何気なくＣＭをみていたが、今ではどのようなメタメッセージが含まれているのかを考えながら見られるようになった
・「これって差別的なのかな」「ジェンダーかもしれない」と思う機会が増えた
・社会の事象について、女性の立場はもちろん、男性の立場にもなって自分なりの意見を持てるようになった
・男女差別当事者にならないように心がけるようになった

■ジェンダー意識への気づき、意識の変化

・男性の仕事、女性の仕事とみてはいけない。男性はおごってくれて当然、強くて頼もしくなければ男性ではないという固定観念はよくないと思った
・ＬＧＢＴの人達が置かれている状況を知って、性別の考え方を改めなければならないと感じた
・ＬＧＢＴについて学んだことを活かし、性別は男・女の二つだけではないと考えられるようになった

■意識の変化による自身の生き方についての考え方の変化・再確認、またはその開始

・自分のワーク・ライフ・バランスについて考え、自分の将来について考えるようになった

・自分の将来について「大学を卒業したらとりあえず２～３年くらい働いて、…結婚して、専業主婦になりたいと考えていた。しかし、もっと働きたいから結婚しない女性や子どもができたら…の現実を知り、今まで自分の中で「女性は～であるべき」という思いが知らず知らずのうちにでき上がっていて将来を考えていたので、どれだけジェンダーにとらわれていたのかに気づいた
・自分から発信していこうと思うきっかけになった。女だから～と遠慮する必要はないんだと思えた。一人の人間として、言葉にして伝えるということを大事にしていきたい
・女性だからこういう人生を生きなければならないなどといった枠にとらわれることなくみんなが生きていいのだと思うようになった
・「女性・男性はこうあるべき」という概念にとらわれていたけれど、もっと楽に生きてもいいのだなと気が楽になった
・必ず結婚しなければならない、…ならない、家事も育児も仕事も全部両立しなければならないとかなどという、こうあるべき姿、正解はないということを改めて学び自分らしく生きていきたいと思った
・男性、女性関係なく、その人がやりたいこと、すきなことを否定せずに、男性はこうだとか女性はこうあるべきという考えを持たずに受け止めることが大切と思ったので、そのように人とかかわっていきたいと思った
・男女差別をなくすために自分ができることを考え始めた

■行動の変容
・小学校へのスクールサポーターとして行ったときに、男子生徒に対して「～くん」と呼ぶことをやめ、全員「～さん」と呼ぶようになった

授業による自身への影響では「ジェンダーに敏感な視点」を得たという記述が12名と多い。それはジェンダーに関する知識を得たことで、または今まで持っていたジェンダー意識を問い直すことでそのような視点が身についたと思われる。これは授業の目的に挙げた「ジェンダーに敏感な視点をもって社会問題や自身の問題を考える」の最初の段階に到達しているといえるだろう。また「ジェンダー意識への気づき、意識の変化」では知識を得ることで、ジェンダーの固定観念に気づき、新しい考え方を取り入れようとしていることがうかがえる。これは前提が問い直されている状態だが、それがさらに自分の考え方をふり返るプロセスに至らなければ、一過性のものに終わってしまうかもしれない。「ジェンダー意識の変化による自身の生き方についての考え方の変化」では、ジェンダー規範に気づき、その視点で「自身の生き方」を見直していることが述べられている。自分の将来への考え方や生き方にいかにジェンダー観が根強く影響していたかに気づいた学生はこれから自身のキャリアを再考する過程に入っていくことが予想される。

行動の変容の段階まで至った学生は１名であった。実際には、この短い期間で行動の変容までに至ることは難しいことでもあろうし、実際にそのような視点を活かす場は多くはなく、行動変容までなされるのかはこれからの変容した意識の持続や、さらなる洞察が進むかによると思われる。

４）性別役割分業意識の変化

問５として「あなたは『夫は外で働き、妻は家庭を守る』という考え方についてどう考えますか」と性別役割分業意識について尋ねた。

その結果、「賛成」はおらず、「どちらかといえば賛成」が８％、「反対」と「どちらかといえば反対」を合わせると74％であった。「わからない」は18％である（図２）。

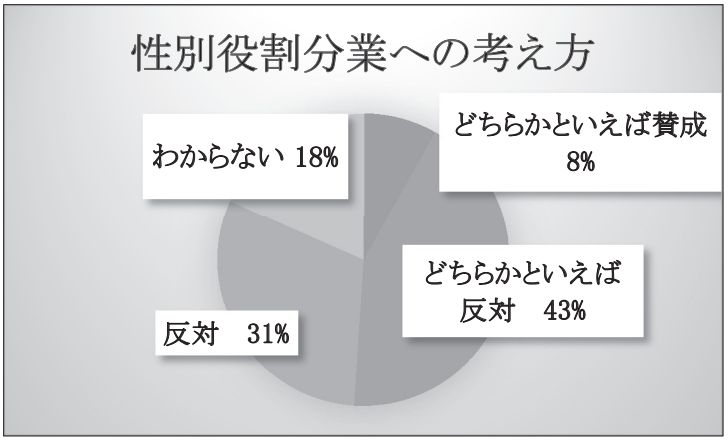

図２　性別役割分業への考え方

2019年の「男女共同参画社会に関する世論調査」（内閣府　2019）における、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考えへの意識に関する結果では、18歳～29歳では「どちらかといえば反対」が38.6％、「反対」が29％で合わせると67.6％であった。今回の当学生の反対74％と較べると、当学生の方が６％程度多いが大きな差はないといえる。

またその性別役割分業意識が授業前と後では変化したかを聞いたところ、「変化した」が62％で、「変化しなかった」が38％であった。また「変化した」「しなかった」と、性別役割分業意識への賛否をクロスして見たところ、「変化した」と答えた学生では、「どちらからといえば賛成」が３名、「どちらかといえば反対」が14名、「反対」が６名、「わからない」が７名であった。

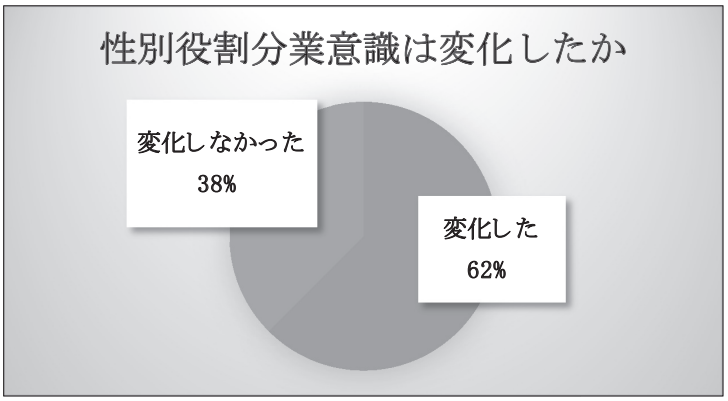

図３　性別役割分業意識の変化

意識への賛否＼意識の変化	変化した（人）	変化しなかった（人）
賛成	0	0
どちらかといえば賛成	3	1
どちらかといえば反対	１４	7
反対	6	9
わからない	7	2

表１　「性別役割分業意識の変化」と「意識への賛否」

変化したと答えた学生には、それがどのように変化したかを聞いた。「変化した」学生のうち、「どちらかといえば反対」「反対」とした学生は12名で、「受講前はこうする（性別役割分業）もんだと思っていたが、受講後は夫だって家事をするし、妻だって仕事をすることもあり、家庭によって違う」という考え方に変化している。これらの学生では、新しい考え方を知り「こういう考え方があるのか」と気づき変化した学生と、これまでの自分の考え方を問い直し、よく吟味して変化させた学生とがいると思われる。この結果だけでは、どこまで主体的に考えたかは推測できない。また以前より反対だったが受講後それがより強くなったという学生が２名いた。また「変化した」と答えた学生のうち、「わからない」とした学生の主な意見は「最初は反対だったが、お互いが話し合い、納得の結果の上ならどちらでもよいと思った」「考え方は様々で、良い悪いのものさしでは測れない」という意見と「必ず女性が家のことをする必要はないと思うようになった」という意見があった。前者はこの考え方（前提）を一度問い直し吟味し、新しく「多様な考え方があり、それを互いに尊重し合うことが大切なのではないか」という前提に変化したといえるだろう。それはむしろ男女共同参画社会が求めている「性別によって決めつけるのはなく、個々の多様性を認めあう」というテーマに近いものに変化したといえるのではないか。

一方、変化しない学生では性別役割分業意識に「どちらかといえば賛成」が１名、「どちらかといえば反対」７名、「反対」が９名、「わからない」が２名であった。変化しないという学生の多くは「反対」、もしくは「どちらかといえば反対」であり、それが変化しなかったと考えられる。変化しなかった学生たちにその理由を聞いたところ、「受講前から反対の考え方だった」学生が大半で、「変化しなかった」としているが、反対の思いがより強くなったという学生もみられ、それは変化したといえるだろう。また、その反対の理由として「両親の共働きをみていたから」とか「家では両親が協力して役割分担をしていたから」という両親の影響をあげる学生も数名いた。また「変化しなく」「どちらかといえば賛成」とした男子学生は「自分が働くか働かないかは妻がきめることだから」という理由であった。

石田（2008）はジェンダー意識の測定のためにゼミの学生に調査を行ったが、その際「自己の性及び既存の性別社会規範」を受容するか否かをゼミの学生に尋ねる自由記述形式の質問が、ジェンダーに対する感受性や評価を測定するのに有効だったと述べている。ただ、「性別社会規範」を受容していると回答してもどのようなことをさしているのかがわかりにくいことが反省として述べられている。性別役割分業意識はジェンダー意識の中核をなすものであり、この意識が変化したか、否か、またその変

化や変化しなかった理由を聞く問いは、ジェンダー意識の変化を測るものとしては妥当であると考えられる。その結果として、授業によってジェンダー意識が変化したという効果があった学生は約60％であったということになろう。ただしその変化は、自身の考え方を問い直し吟味した結果なのか、新しい知識を得たことでそれを取り入れただけのものなのかは判断できない。また「変化しなかった」という学生18名中11名はもともと反対であり、また数名は「分担をどうするかは夫婦で決めることで一般化はできない」という考えをもち、彼らはすでにジェンダー規範に対して否定的な認知をもっていたといえる。

４．まとめと展望

「男女共同参画社会」の授業を、学生が提出した最終回のふり返りシートをもとに分析・考察を試みた。授業の影響としてジェンダーに敏感な視点を得たことをあげた学生は多かった。当初にも述べたようにジェンダーに敏感な感受性による視点は社会問題や自身の認知の枠組みを批判的にふり返り問い直す基盤となる。それをある程度獲得できたことは、その後のジェンダー問題に主体的に取り組む基礎ができ始めたことを意味しているといえるだろう。この視点が継続し、より吟味され自分のものになることで、今後自身や社会を深く考察する力につながっていくと考えられる。

また「あたりまえ」への気づきからは、社会を見る視点の広がりがうかがえ、社会事象や現状、社会問題を理解するためには多様な視点が必要性であるという認識ができ始めていることが推察された。このような視点の広がりと認識が、今後実際に現場等で社会問題と直面した際に活かされることを期待したい。

「自身のジェンダー意識に気づき吟味し変容したか」に関しては「気づいた」という学生は多くいたが、それはクラントンの学習の過程から見ると、その前提に気づき、揺らいでいる段階と思われる。一方、「ジェンダー意識の変化による自身の生き方についての考え方の変化」で述べた学生も含めて、数名の学生は自身のもっていたジェンダー意識に気づき再吟味し、自分の生き方を問い直し、変化している。これは「ジェンダーの視点で自身の生き方をふり返る」という目的に至っていると考えられる。ただそのプロセスをみると、自身の考えを相対化し深く考える批判的ふり返りをしている学生は一部で、多くは深い意味での意識の変容にまでは至っていないと考えられる。

また性別役割分業意識の変化からは、授業の効果としての意識の変化は約60％あったといえる。この変化が、一過性ではなく、自身のキャリアや社会のできごとを考える時の柔軟な視点となるためには、これからの経験の中で問い直され再吟味されていくことが必要となるだろう。注目すべきは、「変化した」学生の中で、性別役割分業を固定的な教条として受け止めるのではなく、むしろ主体的にそれを捉え直し、男女共同参画社会のテーマである「性別ではなく、個々の多様性尊重」にシフトした学生が数名いたことである。ジェンダーに関する授業の目指すところはまさに多様性の尊重であり、このような主体的思考をさらに培う授業設計が必要である。

また、社会問題や社会構造にジェンダーが関係していることを知識として知った学生は多かったが、その視点で主体的に社会問題等を考え分析することは充分にできたとはいえない。例えば、それぞれの「望む未来」を実現するために必要なことを社会

面で考えディスカッションする活動や、番組分析、ＳＤＧｓから世界の貧困とジェンダーを考える活動など限定的なものであった。ジェンダーに敏感な視点をもって、社会問題を主体的に考察する活動がさらに必要であろう。授業の最終課題として「新聞等の記事にある一つの記事（事件、社会事象、評論等）をジェンダーの視点で考察する」という課題を課し、社会問題をジェンダーの視点で考察することを求めたが、このような活動を授業のプログラムの中にさらに組み込み、社会問題をディスカッションする経験を増やすことも効果的だと考えられる。プログラム構成を再考したい。

「ジェンダー意識の変容」という視点で全体をふり返ると、ジェンダー意識はある程度変容したといえる。ただし、それをクラントンの「意識変容の学習のプロセス」モデル図から見ると、授業による働きかけによりジェンダー意識という前提に気づき、それを吟味することで変化した段階の者が多いと考えられる。例えば「男性は外で働き、女性は家庭を守る」という意識に関して、現在の社会状況から見ると適当でないと考え、その意識を変化させた人もいる。しかし、自分事として自身のくらしをその視点でふり返り、また自身がなぜそれをよしとしてきたのかという源に関する吟味や、それを持ち続けることにより自身の生き方にどのような結果を及ぼすかまで考察を深め変化した学生は一部だったのではないだろうか。どのようなふり返りや思考のプロセスを経て意識の変容が起こったかは、インタビューなどを通しより掘り下げて調査する必要があったと考える。今後の課題としたい。

全体として、どの目的も初期の段階までは概ね到達できたと考えられるが、批判的なふり返りや、主体的な深い考察までには至っていない学生も多いとみられ、それらを進めるには、一つの問いを深く考える活動や、学生同士が互いに意見を出し合いディスカッションし自身の考え方を客観的にふり返るメタ認知活動をより多くとりいれることが有効であろう。またこのような学習は短時間でなされるものではなく、継続することが必要である。そのためには自身の経験や社会のでき事に違和感を感じられる感受性と、それらを問い直し吟味し深く考える主体的な思考力を形成することが土台づくりとして大切である。そのような力を培う授業設計をさらに研究していきたい。

参考文献・参考資料

Cranton,Patricia（1992）*Working with Adult Learners.* Wall&Emerson,Inc.Canada（＝1999 パトリシア・クラントン著，入江直子・豊田千代子・三輪健二訳『おとなの学びを拓く』鳳書房）

Cranton,Patricia（1996）*Professional Development as Transformative Learning.* Jossey-Bass（＝2004 パトリシア・クラントン著，入江直子・豊田千代子・三輪健二訳『おとなの学びを創る』鳳書房）

中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（2011）文部科学省

石田勢津子（2008）『授業内容が大学生のジェンダー意識に及ぼす影響』名古屋外国語大学外国語学部紀要 第41号

河野銀子・藤田由美子編著（2014）『教育社会とジェンダー』学文社

木村涼子（2015）「学ぶ 教育のプロセスにおける性差別を考える」伊藤公雄・牟田和恵編『ジェンダーで学ぶ社会学』世界思想社
国立女性教育会館（2015）『大学における男女共同参画の推進』株式会社 悠光堂
Mezirow,J.（1978）“Perspective Transformation”, Adult Education,vol28
内閣府（2019）『令和元年度男女共同参画に関する世論調査』
大野曜（2002）「国立女性教育会館の女性学・ジェンダー問題に関する取組みと今後の課題」『学術の動向』第７巻（４），日本学術協力財団、41－48
山澤和子（2009）『ジェンダー学習における気づきと意識変容のプロセス』国際ジェンダー学会誌 vol. 7
湯川隆子（2006）『大学生におけるジェンダー認識の変容過程』総合研究所所報／奈良大学総合研究所 編 vol.14
湯川隆子・村松祐一郎・石田勢津子（2013）『ジェンダー認知の変容とその測定』奈良大学紀要 vol41，239－258

国立女性教育会館『女性学・ジェンダー論関連科目データベース』
（http://winet.nwec.jp/jyosei/img/logo.png）（2020年10月16日閲覧）